

岐阜県神岡町土へ跡津川でヒサマツミドリシジミを採卵

吉村 久貴

北陸三県におけるヒサマツミドリシジミの産地としては、福井県南部小浜市石里ヶ岳周辺⁽¹⁾、富山県下新川郡⁽²⁾⁽³⁾、婦負郡⁽⁴⁾が知られている。

神通川支流、宮川流域の富山県・岐阜県県境（富山県婦負郡細入村、岐阜県吉城郡宮川村）の産地については、1979年に、会員の井村氏により生息が報告された後、数回における調査によって、産卵数に隔年周期性のない大々産地であることがわかっている。

1982年12月5日、筆者は岐阜県吉城郡神岡町土地内跡津川岸のウラジロガシより、ヒサマツミドリシジミ卵5卵（4生卵、1寄生卵）を採卵したので報告する。

現地は、国道41号線を神岡町土より折れて、大々和峠に至る跡津川岸であるが、前記の細入村、宮川村の産地より、直線距離にして10km程離れている。

跡津川部落より上流は、通行止のため調査できなかったが、土へ跡津川部落間ではウラジロガシは比較的少なく、杉ヤクルミの大木の多い環境であった。

また、国道41号線沿いの茂住駅や杉山トンネル付近の高原川（神通川支流）岸にも、多数のウラジロガシが分布している^{たけ}ので、ヒサマツミドリシジミの生息は十分に考えられる。

会員諸氏の調査を期待したい。

文 献

- *1) 日本産蝶類大図鑑 藤岡知夫 (1975) 講談社
- *2) 富山県の昆虫 15. ヒサマツミドリシジミ pp.304 (1979)
- *3) ヒサマツミドリシジミ 富山県東部に産する 五十君哲郎
昆虫と自然 13(6) (1978)
- *4) 富山県神通川のヒサマツミドリシジミについて 井村 正行
翔 №4 (1979)

ブナグラ谷廻行記

松井 正人

1982年8月14日、富山県上市町のブナグラ谷を溯って赤谷山^{カサヤマ}まで行って来ました。

車は白萩川の方へは、入れず、^{ババ淡}馬場島より徒歩でブナグラ谷に入る。このシーズンはオロロが多くて、車からおりると、すぐたくさん水とついてくる。気にしないと良いのだが、時々かみつくので気が気ではない。(しかもれるとたいへん痛くて大きく腫れる。)

オロロを気にしないふりをしながら、取水エンテイ右岸の鉄ハシゴを登る。エンテイの上には、いくらか広い河原があり、イワオウギが咲いていて、ブルーが翺んでいた。あわやと思ったが、レメシジミばかりであった。

河原をジブジブと溯ると、右岸より大ブナグラ谷が流れ込んでいて、この谷付近より右岸に古い赤道が残っている。この道沿には、パラパラとウスバサイシンが見られた。

赤道を歩いてエンテイを二つ越えようと、この谷のエンテイは終りであった。

ここからが、本当に楽しい楽しい沢歩きです。途中河原に1ヶ所イワオウギを見つけたものの、レメシジミしかいなかった。

沢を半分位溯った所より小雨が降り始めたが、どうせ水の中を歩いているので、雨位降った所で問題はないが、蝶が翺ばなくなるので、困ったものだと思いつつ溯った。

ブナグラゴロの出合まで来ると、ガスが出てきて尾根が全く見えなくなっていた。ブナグラゴロの登りはきつく、足下が崩れ易い。おまけに尾根がガスで全く見えないので、何処へ登ったらいいのかわからずたいへん苦勞した。

左へ左へと登ったところ、やっぱり左へ行き過ぎていて、右の方へ修正している時、何かがたくさん翺んでいた。

小雨が降ってガスがきいているので、よくわからなかったが、そのひとつが近くまで翺んで来て、ベニヒカゲであることがわかった。

ここよりブナグラのゴルはすぐであった。小雨が止みゴルで休んでいると、たくさんベニヒカゲに交ってクモマベニヒカゲとコヒョウモンが翺んでいた。

ゴルの標高は約1750mで、ササ原である。このササ原の中にも、ウスバサイシンが生えていた。ゴルより赤谷山は大雨で蝶など全く見なかった。

DATA (目撃)

1982年8月14日

ブナグラ谷

ブナグラのソル

レキシジミ 3♂1♀

ベニヒカゲ 49数

ヤカチチョウ 3exs

クマバシカゲ 3exs

ホシミスジ 1♀

エビエモン 1ex

アサマシジミの庫内飼育

松井 正人

アサマシジミの幼虫シーズンともなると、あちらこちらのアサマシジミが集まってきて、飼育ジゴク、餌ジゴク、はたまた羽化ジゴクに陥ることがあります。

そんな時、こんな方法があるのです。飼育タッパーと冷蔵庫へ入れてしまいます。

幼虫の場合、昼は庫内、夜は室内と繰り返し変えることにより、最終幼虫期だけでも10日程伸ばすことができ、蛹になってからだとずっと庫内に入れっぱなしで、1ヶ月は大丈夫です。

注意することは、庫内で氷らせない事と、庫内より出した時にお湯をかけない事です。

以上は実際に試みて、成果を得たものですが、庫内の餌用タッパーから1ヶ月ぶりに幼虫がころがり出てくることなどを考えると、幼虫の場合も1ヶ月位の連続庫内飼育が可能かと思われます。どなたか試してみてください。

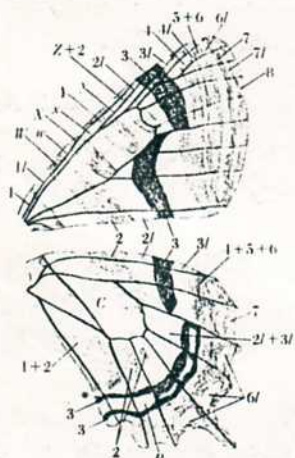
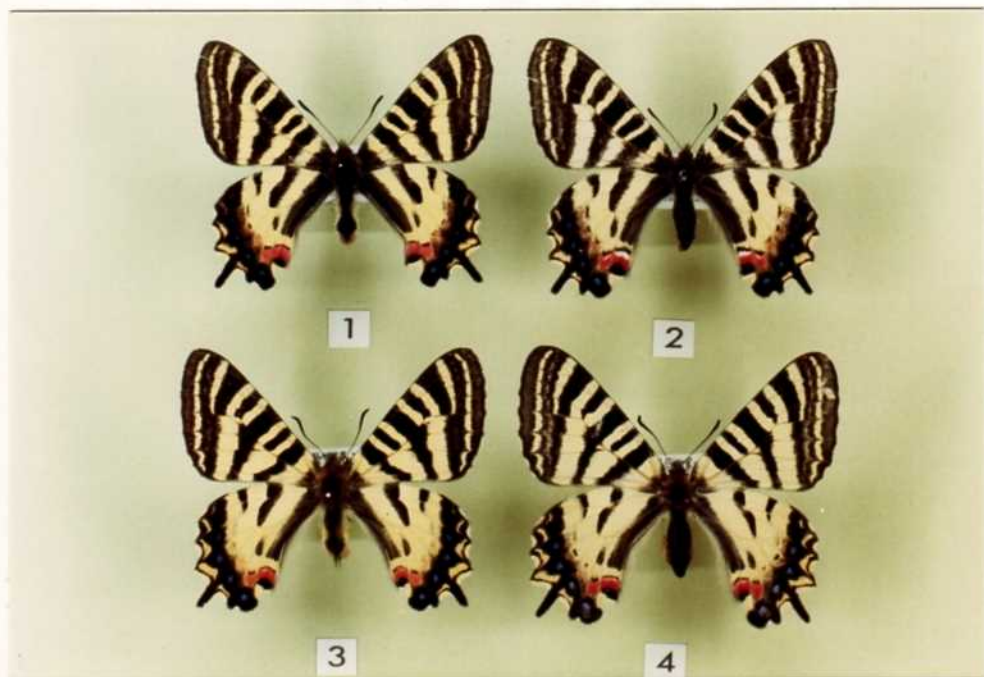
長野県産レキギフの斑紋変異について

吉村 久貴

Luehdorfia 属が、産地ごとの複雑な地理的変異をみせることは以前よりよく知られているが、今回、長野県下の北安曇郡小谷村産レキギフと、上伊那郡入笠山産のレキギフを比較した写真を撮影したので、雑誌上に発表する。

写真の No.1, No.2 は、上伊那郡入笠山産、No.3, No.4 は北安曇郡小谷村産のものであるが、入笠山産のものの方が、個体そのものが小型化する傾向にある。これは入笠山産が標高1400~1500mであるのに対し、小谷村産が400~500mであることが、

要因でないかと思われる。また、いずれの産地においても、年の廻り
来色の黄色味が、古に比べると薄い。



Laachdaria の斑紋(三枝豊平, 1974)に加筆)

- | | | |
|-------|-------------|-------------|
| No. 1 | 長野県上伊那郡入笠山産 | 1980. 5. 3 |
| No. 2 | " | " |
| No. 3 | 長野県北安曇郡小谷村産 | 1979. 5. 11 |
| No. 4 | " | 1980. 5. 2 |

斑紋では、入笠山産の方が上翅
1, W, Yの黒帯が共に太く、下翅も
1+2, 2の黒帯が太く、2l, 2l+3l,
3lの黄帯が細い。

一目して、入笠山産のものが黒っ
ぽい感じがし、小谷村産の方が、白
っぽい感じがする。小谷村産の方が
色白の美人という印象を受ける。

最近発行された信州の昆虫(松本

むしの会編)の16ページには、小谷村産のヒメギフをさして「この地域のもは、黄色部が多く黒条が細いので、全体的に黄色く、特に南小谷周辺のもは、この傾向が著しい。」という記述が見られる。いずれも野外品での比較検討である。被検個体は、入笠山産5館2群、小谷村産5館2群であり、いずれの個体にも同様の傾向が見られる。

なお、*Luedarzia*の斑紋の図は、日本産蝶類大図鑑 藤岡知夫 講談社(1975)より引用したが、詳しい斑紋解析については、
昆虫と自然 vol.8 No.5 (1973) 三枝豊平
を参照されたい。

古い台湾のはなし その1

キョウキキホマレ

筆者が蝶採集のために台湾へ渡ったのは、もう12年以上も前のことである。昔前のことである。金子ニ久氏が述べている、「昔の事を口にする様になつたら-----」という訣で、本当にオジンになってしまった。

今頃 台湾採集記なんて古くて役に立たず、南国の蝶もポピュラー化が激しく、一般にも目に入り易くなっていて何の面白味も無いかに見えるが、井沢氏や松井、若下、工本氏が外国へ採集に出る話を言われると、もうほとんど外国へ出ることの不可能な下級役人には、昔たった1回、行った事のある台湾が非常に懐しく思えるのである。とにかく私の台湾珍道中を少し綴ってみることにする。

私の台湾へ行ったのは、1970年9月13日のことで、大阪伊丹空港よりDC-8(日航機)で、台湾松山(スワン)空港へ行った。当時、大阪は、日本万国博の最終月でごったがえしてあり、今の言葉で表現すれば、バンパク、スーパーのものだった。

飛行機には、ほとんど日本人の姿は無く、米国人が大多数を占め、中国人(台湾人)が2~30名ごらいたであろうか? 周囲は英語が飛びかい、これはエライものに乗ったと思っただが、どうなるものでもない。

初めての飛行機に酔い、隣に聞くスクエワーズの美しさにも酔い、ほどおく松山空港に着陸(2時間弱、時差1時間あり)。税関、荷物の検査、検査おとさ済ませ、空港ロビーに放り出される。ここでも周囲はほとんど英語。

恒春の町に着き、早速、安宿を捜し投宿する。(廣大旅舎一泊300円位) あとは、2人で街の中をブラブラと散歩。小さな町なのに、とにかく人が多い。大きな声を出す人が多い。(今から考えると祭り「中秋の名月」のためだったのかも知れない。) 大きなバナナや月餅を買ってパクついたものだ。

恒春の街は、昔の中国風情そのまゝの感があり、南門と書かれた古い城壁が残っており、中国旅情を満喫できる。しかし、所々に「打倒日本帝国主義」とか「東洋鬼の〇〇」という抗日運動のスローガンが書き残されているのを見ると気持ちやがゆるぐ。宿のカミサンが「今晚、娘さんいりませんか」とくる。これが毎日だ。お客に対する挨拶回りでもいおうか。第2夜はケケッと一番安い旅社に宿泊したため、隣の部屋の声やすすまじく、何とも寝苦しかったが、言葉がさっぱりわからないので、どんな風なのか着目見当がつかない。

3日月(9/15) いよいよ採集だ。日頃の腕の見せどころ。(しかしながら穿着は当時、蝶々2年生で、ギフヒメギフさえ混乱していた頃) 目的地は墾丁(ケンティン)公園。広大な自然公園で遊歩道が整備され、女性のガイドが数人入口に待機している。その一人が、ついでに我々のネットを持った姿を見て走り寄ってきた。

「私、この公園の案内人です。私願って下さい。私、蝶々採れるところ知っています。キシタキョウ(キシタアゲハのこと)沢山、沢山います。私、案内します。」必死の顔で自分を雇えという。日本語もかなりうまい。30~40代のオバさんである。この人張秀春という女性で墾丁で大変世話になった人である。

この人の亭主は、林業試験場の技師で林貴三(当時、日本鱗翅学会会員でもあった)といい、当時、台北へ単身赴任しているお役人であった。(注、台湾では結婚しても名はもとのままらしい)我々は、彼女の1日のガイド料を支払い、公園内の好POINTをガイドしてもらったのである。

台湾へ来て初めてネットしたのが、ルリモンジャノメ、次いでリュウキュウアサギマダラ、ルリマダラ、ホリシャルリマダラ、シロオビアゲハ、ベニモンアゲハ、オオベニモンアゲハ、アオスジアゲハ、オオゴマダラ etc. とにかくその夥しい数。全部をネットインなんてのは至難の技。しかし、アカアゲハらしきものと、コモンタイムをネットできなかったのは今も非常に残念で悔しい思い出である。

採集先(林興さん)の案内で墾丁の道なきジャングルへ足を踏み入れ、程なく水牛(おとない)を放してある湿性草原へ出た。赤、白、黄色の細かい花(ランタナ)には無数の蝶が吸蜜に群がり、その姿の素晴らしさ。何とキシタアゲハもこのランタナに来るのだから……同行

の大野氏は、さかんにキシタを撮っている。ボクは鬼のいぬ間に、
思う存分キシタをネットした。(合計36頭)

無数に舞うツマバニチョウ(採り逃がすは一気に上空へ一直線に舞い上
る)、刻の雑木林の中でキラキラ前翅を光らせるルリウヲオミジミ。
木陰にスーッともぐり込むコノハチョウ、キオビコノハ。時期がはず
れて傷んでいるボロボロのシロオビアゲハ……etc. 書き出したら、
足りない。

この日の晩より我々2人は、林太々の家で民宿させてもらった。
当夜、台湾は“中秋の名月”を祝い、街の中は爆竹がボンボンなり響
き、種々の屋台が並び、いろんな余興があり楽しい晩であった。何
とか言う地酒は臭くて飲めなかったが、ビール(比較的)に高価)は
美味であった。過去に林家で投宿された日本人の土産品のサントリ
一のダルマを林太々は、我々に振舞ってくれた。

当時、石川むしの会々員で、金沢に在住していた倉橋弘氏も、こ
の1ヶ月前に林太々のお世話を受けていたらしく、倉橋さんからの
エピソードが見せられ、以外な所で知人が話題になりびっくりしたも
のだ。

林太々家には3人の娘がいた。私の手帳には林^{シン}美華、林^ミ美恵
林^ミ美蘭とサインしてくれる。当時、小学校3年生と5年生ぐらいだ
ったか?今は年頃の娘になっているはず。1人は家を離れて上級
学校へ行っていて不在)

ここでの思い出は、太々がすすると登って取ってきた果物を半
分にしてお勺ですくって食べたパイアの味がまことにおいし
かったこと。トイレが他の家と共同になっていて、20~30m位歩い
て用を足さなければならぬ。しかし、夜は危険なのでくさむら
に台湾ゴブラがいる)注意しろと言われて小便を我慢したこと。(2
~3週間前に米国人の若い新婚のカップルが公園内を散歩してい
て新妻がゴブラに咬まれて死亡した話を聞いて、なお足が痺んだ。)先
月の晩に“月下美人”が開花するのを観察したこと。公園内のガラン
と灯台を望む観海楼(展望台)にて3回昼食をとり、ウエイトレスと
仲よくなり雑談したり、日本の歌謡曲を唄ったりしたことetc。

翌朝、台湾南端の町恒春を離れ、恒春発金馬号快速バスで高雄市
へドッキリする。(37.5元)今夜は總分余裕があり、気から外を眺めな
がらの移動は、もの珍しいものばかり。時々、野外集会場みたいな
ところで、人だかりしているのを目撃する。何だろうとよく見ると
テレビなのである。そういえば、日本でもこんな時代があった。当
時、台湾の生活程度は、日本に比べ10年以上は遅れていただろう。
高雄駅より鉄路局の観光特快号という快速列車として日本で

は特急に相当する)に乗って北上した。豪華な列車は、あまり利用する人はいないらしく、我々二人の乗った車輛には、我々以外に若い女性客が二人いるだけ。列車内ではしきりにお茶、タオルのサービスがあり、日本の国鉄に比較して格段の違いがある。しかも容姿端麗美人ウエイトレス付である。

1時間半ぐらいで、我々は乗替のため、^{ハイ}嘉義駅で下車、阿里山登山鉄道の人となる。スイッチバック方式の登山鉄道は実に4時間余をかけてゆっくり走る。

阿里山(2272M)は玉山(旧新高山)の登山口にあたる。比較的高標高に位置するため、盛夏スタイルの薄着で通していた我々は、だんだん肌寒さを感じ、終点につく頃は、とうとうリュックの底に入っていたセーターを着なければならなかった。吐く息は白く、鼻水がたれ(二人とも鼻があまりよくない)。泊った宿で煎餅トランクを買ったが寒くて眠れない。寒さのためにか大野氏が夜中にウーンと唸る。(実は、墾丁公園でチョットした事故で胸を岩に強打しており、そこが痛んだらしい)

登山鉄道の中でアクシデントが一つ。中国人若夫婦の妻の方のキップと私のキップがダブって発売されたらしく(全車指定)ダンスの方が大声で、の席は自分の女房のものだと主張してワメキちらし閉口した。年輩の車掌が飛んできて、日本語で「心配するな」と言う。誰かが知らせたらしい。一応我々が外国人だということ、席を譲ってくれ、若夫婦はどこか別の席へ移っていった。

列車が遅いので、突からネットを振りながら採集したらタイワンフタオシジミ(キマダラリリツバメの仲間)とメフタオシジミなどが採集して狂気したこと。(あとでわかったが台湾では普通種)として、アケボノイデハガフンサカ飛翔するのを見たこと。

阿里山より下山してくると再び、暑さをじわりじわりと感じ始める。鼻水が乾く。ノドが渴く。台湾は上水道の設備が悪いので生水を飲料用に供することは禁物である。我々はもっぱらコカ、コーラ(日本製に比べ高い。1本180円相当だったと記憶している)かリングジュース、サイダー(黒松沙土)を愛飲した。

山へ採集に入る時は、水筒に湯ざましを入れるか、あるいはジュース類のビン(当時カンはまだなかった)をナップザックに数本を入れるかして入山したものだ。

→ 以下 古い台湾のはなし その2につづく

◆◆ 編集子判 ◆◆

チョウキチボマレと嵯峨井湾郎氏の原稿用紙8枚におよぶ膨大な原

稿には、ただただ驚くばかりで、勝手にその1、その2に分けて本誌上に載せることにしました。古い台湾のはなしはまだ外国へ行ったことのない編集者などにとっては、たいへん興味が持たれます。つづきは「その2」として続刊上に発表の手定むるのでお楽しみに!!

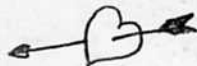
《会員の動き》-特報-

本会の有力幹事 松井正人氏と女性メンバーの若きホーフ岩下幸子嬢は、本年5月3日午前出羽町の石川厚生年金会館にて結婚式を挙げる事が正式に決まりました。

松井氏は28才、岩下嬢は21才。華やかなりのこの2人の前途を心からお祝い申し上げます。なおハーフはオパールとの手定むある由。もちろん採集を兼ねるそうであるが、同地での採集情報に詳しい方、松井岩下両氏に御教示下さい。日程は、10日間前後です。ここで挙式を前に2月6日結婚式を交わし

氏が、千ヨキチホマレと山崎井澤伊夫嬢が媒酌人という大役をお世つか水状。
千ヨキチホマレはレビウモビウで口上を述べ、幾久いを忘れて、女房に注意をされてしまった。
マクグンヒヒロクンはハートの中でマクグンヒヒロクン親は共々ニコニコマツで話もはずんだが肝心のマクグンヒヒロクンを身とめた言葉は最後まで公表されなかった。が、とにかく、めでたしめでたしでした。

(3)



目 次

岐阜県神岡町、土〜跡津川でレサマツミドリジミを採集	吉村久貴	1
ブナゲラ谷遊記	松井正人	2
アサマシジミの庫内飼育	松井正人	3
長野県産レメギフの斑紋変異について	吉村久貴	3
古い台湾のはなし 其の1	千ヨキチホマレ	5

翔 № 37

1983年3月6日(日)発行

発行：金沢市三ッ新街4-9-33 松井正人氏・百万石蝶談会

校正・編集：吉村久貴